

## 日本佛教彫刻史の概要

稻垣 直

平成二十六年十一月二十四日

その劈頭を飾るものとして法隆寺西院金堂釋迦三尊を擧ぐるに異議を唱ふる輩多らざるべし。古拙の裡に氣韻の暢達せるを認む。

次にその貌かたちに於ては些か是と異なり、寧ろ圓滿具足の相に幾きは藥師寺金堂藥師三尊なり。造化の妙を竭つくし、稀世の神品、その狀あたかも日輪の波濤を蹴つて昇騰するの概ありと謂ふ可く、啻に日本美術史上に聳立するのみならず、世界藝術の中に在つて泰西ルネサンス期に簇出せる巨作と光を爭ふの觀あり。或は曰はん“サン・ピエトロのピエタ、フィレンツェのダビデは人の藝術、藥師三尊は神の藝術なり”と。

第三に擧ぐ可きが東大寺三月堂本尊不空絹索觀音けんじやくなるは論を俟たず。三目八臂の奇拔なる狀貌を少しの破綻もなく纏め上げ、看る者をして鑽仰の念に滿たしむ。

その後は、觀心寺如意輪觀音を頂點とする密教彫刻の流入あり、一方又粗荒なる一面を有する神護寺藥師如來立像を以て代表とする造形も見られ、混沌として歸する處を知らざりしが如きも、漸次、棲霞寺阿彌陀三尊、醍醐寺藥師如來に視る如き和風の兆し現はれ來たり、遂に康尙・定朝父子に依る和樣彫刻の技法確立せられ、佛像彫刻界は翕然として此の一流に統一せらるゝに至る。

康尙の遺作を同聚院しゆの不動明王と爲せば、定朝の代表作としては平等院鳳凰堂阿彌陀如來を擧げざる可からず。但し鳳凰堂像は定朝晩年の作にして、その最高峰たる“天下是ヲ以テ佛ホトケノ本樣ト爲ス『長秋記』”と嘆稱せられし西院邦稿朝臣堂阿彌陀如來の今日に遺存せざるを惜しむ。

思へらく、上記藥師三尊を動の精髓とする時は、鳳凰堂阿彌陀如來は靜の極致と謂ふに足り、兩者相俟つて日本美術の名を八荒に光被するに與あづかつて力有りと稱す可し。

たゞ一度び定朝の作風天下を風靡するや、その後は是を模倣するに汲々とし、その途次に於ては法界寺阿彌陀如來の如き優作は認めらるゝも、衰ふるや“彊弩の末力魯稿に入る能はず\*”と形容せられし如く、果ては“藤末鎌初”の名の下に一括せられ駄作の連續となれり。

六勝寺竝に鳥羽離宮（文語の苑小冊子第十號所載）しばしばの内部を飾れる佛菩薩群は定朝様の未だ頽勢に陥らざる頃の諸作品と推定せらる。

大廈の將に顛れんとするや一木の支ふる處に非ずとは楠々口にせらるるも、その間に在つて奈良佛師運慶とその一門の活躍こそ一脈の新風と稱するに足れり。彼自身の眞作としては圓成寺大日如來、淨樂寺阿彌陀如來、興福寺北圓堂彌勒如來のみと多からざるも、その流風に浴する者尠からず。

又、その中に在つて、快慶は獨自の境地を拓き、日本人の嗜好に投げる“安阿彌様”なる甘美の作風は永く後世に傳へらるゝに到れり。

＊彊弩の末力魯稿に入る能はずⅡ〔漢書 〔韓安國傳〕〕強い弩<sup>いしゆみ</sup>で射た勢ひの強い矢も、最後には勢ひが弱まり、魯國に産する薄絹を刺しつらぬくことさへできないといふ意。強いものも衰へてしまつては、何事もなすことができないたとへ。（大辭林による）

彊弩の末勢魯稿を穿つ能はずⅡ〔史記〕とも

。